



塩谷定好《トンネルのある風景》1930年 ゼラチン・シルバー・プリント 鳥取県立博物館蔵

企画展 令和元年11月16日(土)～12月15日(日)

2 生誕120年 芸術写真の神様 塩谷定好とその時代

企画展 令和2年1月25日(土)～2月25日(火)

3 生誕100年 國領經郎展 一静寂なる砂の景一

特別移動展示 鳥取県立博物館会場：令和2年2月8日(土)～3月8日(日)

4 変わりゆく郷土 写真で見るとっとり 1968-2018

5 [自然] コラム 「ジネズミ」を知っていますか？

6 [人文] コラム 戦国時代の因伯を駆けた風雲児たち 一尼子再興戦450年一

7 [美術] テーマ展示 コレクション展「美術家大辞典」を編み始めて

コラム “美術館が建つまで”を伝えるフリーペーパーを発行します！
—美術館整備推進事業「アートの種まきプロジェクト」

8 美術館準備室コラム、京都国立博物館からの里帰り展示



生誕120年 芸術写真の神様 塩谷定好とその時代

(主催)「塩谷定好展」実行委員会

写真の技術は江戸時代の終わり頃に輸入されてから、およそ180年が経とうとしていますが、この年月の間に度重なる技術革新により、あらゆる人々を魅了し続けて来た歴史を辿って来ました。ダゲレオタイプから湿板～乾板写真を経て、フィルムが開発されたのが19世紀末。さらに20世紀後半からデジタルカメラの開発と普及が進み、2010年代にはスマートフォンとSNSの爆発的な流行によって、カメラと写真は日常の必需品とさえ言える時代になりました。

今年で生誕120年を迎える塩谷定好(1899年～1988年)もまた、写真の魅力にとりつかれた人物のひとりです。彼が写真を始めた大正末期は、フィルムの普及とカメラの小型化といった写真機材の技術革新により、写真館や富裕層に限られていた写真が一般にも普及していった転換期でした。鳥取県の赤碕(現琴浦町)に身を置きながら、山陰の風景や人物を独特のソフトフォーカスでとらえたその作品は、「ヴェスト・ポケット・コダック」(Vest Pocket Kodak)という、単玉レンズ付きの小型カメラによって撮影されたもので、安価で携帯性が高く、自身の内面を投影させた詩的な表現が可能であ



《静物(エリカポウレア)》1929年



《三人の少女像》1930年

ることから、アマチュア写真家たちの間で大流行、「ヴェス単派」とも呼ばれる一派さえ形成されました。

塩谷の初期の傑作である《雪日》(下図参照)は、吹雪の中大きな荷物を背負ったふたりの人物の姿が写されていますが、画面の構図や柔らかい輪郭線、繊細なグレーのグラデーションは水墨画を思わせます。この時代の写真家たちは、写真の記録性や現実性といった特徴よりも、表現力や描写力による芸術性に惹かれ、いかに芸術的な作品をつくるか、に専心していました。塩谷の場合は、上述したソフトフォーカスの技法のほかにも、ディストーション(歪曲)やセピアの濃淡の繊細な調色など、あたかもひとつの工芸品を作る

アマチュア写真は「芸術写真」と呼ばれ、全国各地に愛好家のグループが設立されました。塩谷定好もこの流れを汲む代表的な写真家のひとりとして、近年ますますその評価が高まっています。

鳥取県立博物館では、平成9年に塩谷定好の代表作100点を収集し、以後常設展で折に触れ作品を展示してきましたが、今回の回顧展では、1920年代初期からあまり活動を知られていない70年代まで、塩谷定好作品の全貌を紹介する予定です。植田正治が「神様のうえだしょうじ」として憧れ、後の鳥取県の豊かな写真文化の礎を築いた第一人者の足跡を130点あまりの資料で検証します。あわせて、同時代の芸術写真を代表する作品やカメラクラブで活動を共にした仲間たちの資料も展覧し、それぞれの個性が花開いた日本の写真の黄金期を振り返ります。

(美術振興課 赤井 あずみ)

《関連イベント》

会期中の土曜日には、講演会、展示解説、ワークショップなどのイベントを予定しています。

■企画展観覧料：一般/800円
(団体・前売・大学生・70歳以上/600円)
高校生以下無料

※掲載作品は全て塩谷定好作品
ゼラチン・シルバー・プリント 鳥取県立博物館蔵



《雪日》1922年

るかのよう、一枚の画像を加工し、作品性を高めて行きました。現代においてはフォトショップをはじめとする画像加工アプリが大変な人気を博しており、私たちにもその楽しさは想像できるのではないのでしょうか。

大正から昭和にかけて流行したこうした傾向を持つ

生誕100年 國領經郎展 — 静寂なる砂の景 —

鳥取県の自然景観を特徴づけるものとしてまず思い浮かぶのはやはり、「海浜に広がる白い砂」なのではないでしょうか。鳥取砂丘をはじめ、北条砂丘、弓浜半島の砂浜など、県内の海岸地帯各所には、実に印象的な砂の風景が展開されています。白く小さな砂粒は私たちに美しい風景を見せてくれますが、それと同時に、「無限」や「孤独」を想起させるものとして、様々な芸術家にインスピレーションを与えてきたシンボリックな存在でもあります。

《白い蔵》1937年 酒田市美術館蔵



砂にまつわる小説では、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの『砂の本』、安部公房の『砂の女』、フランク・ハーバートの『デューン 砂の惑星』などを挙げることができます。美術表現では、砂丘を背景にした植田正治による写真作品が、また前田寛治らの「砂丘社」の活動なども歴史に刻印されています。そして、砂丘や砂浜を舞台とした情感豊かな絵画作品を数多く描いたことで知られる、日本芸術院会員で日展を中心に活躍した戦後日本を代表する洋画



《空港への路》1958年 横浜美術館蔵

家のひとり國領經郎（1919年～1999年）の存在を忘れてはならないでしょう。

「むきだしの自然」と國領が語った「砂丘」は、訪れた人々の詩的感覚や人生観を揺さぶり、孤独な瞑想の時へと導いていくような、静寂さに満ちた神秘的な場所です。そのような砂丘に強く心を惹かれた國領は、静岡県の中田島砂丘や

浜岡砂丘を皮切りに、鳥取砂丘や山形県・酒田市の庄内砂丘など日本各地の砂丘地を取材し、砂のある茫漠とした風景とさまざまな人物、そして鳥たちを登場させる独特の作品世界を構築しました。

画家の没後、鳥取県はご遺族から17点もの油彩画の寄贈を受け、折に触れ当館の展示の中で紹介してきましたが、本年が國領生誕100年となることを記念し、あらためてその画業を見つめ直すため、國領出身の地・横浜の横浜美術館と当館、酒田市美術館が所蔵する國領作品を中心に構成する回顧展を企画しました。展示では、初期の



《遠い海》1977年 鳥取県立博物館蔵

風景画から中期の点描作品、そして砂丘地に取材した晩年までの大作を中心に、取材の際に描いたスケッチなどを含めて100点程度の作品や資料を紹介します。本展のための事前調査で、画家が砂丘地等で撮影した大量のスナップ写真を確認しましたが、その中には幾つもの鳥取の風景がありました。この機会に、鳥取の砂の風景を歩いてその素晴らしさを再確認するとともに、ぜひ本展会場にて、國領が砂のイメージに託そうとしていたものとは何だったのかを皆さんに感じとっていただきたいと思います。

(美術振興課 三浦 努)

（國領經郎顕彰会提供）
國領が鳥取市浜村海岸で撮影した写真



《杜を映す溜水》1993年 鳥取県立博物館蔵



※掲載作品は全て國領經郎作品

《関連イベント》

会期中の土曜日には、國領と交流のあった方による特別講演会や担当学芸員による展示解説などのイベントの開催を予定しています。

■企画展観覧料：一般/800円(団体・前売/600円)大学生以下・70歳以上無料



(写真1)鳥取市街 第1次写真



(写真2)鳥取市街 第11次写真

特別移動展示

倉吉博物館、八頭町中央公民館、ヴィレステひえづで開催されました。今後は下の会場で巡回展示されます。
大山町名和公民館(R1.12/6 ~ 12/19)→岩美町中央公民館(R2.1/7 ~ 1/16)→県立博物館(R2.2/8 ~ 3/8)

変わりゆく郷土 写真で見るとっとり1968-2018

私たちの住んでいる地域は、時代を経る中で多様な面でその姿を変えています。そのような変化をとらえるため、当館では鳥取県内各市町村教育委員会と共同で県内の地域の姿を地上・航空双方から記録する「郷土視覚定点資料収集事業」を行ってきました。その最新の成果を広く知っていただくための展示「変わりゆく郷土 写真でみるとっとり1968-2018」について紹介します。

「郷土視覚定点資料収集事業」は高度経済成長期の最中の昭和43年に始まりました。この事業について当時博物館長をつとめた藤岡忠信氏の回顧録(『あの山 この波越えて』1995年)によれば、「写真による郷土史づくり」を目指したもので関係各署の大反対をうけたものの藤岡氏の懸命の働きかけにより事業化にこぎつけたというものです。その後、5年おきに航空・地上双方から定点写真が撮影され、平成30年の撮影で第11次となりました。この間撮影された膨大な写真は50年分の鳥取県の変遷をたどる貴重な資料として、当館が所蔵しています。

近年、インターネットの普及により、上空から撮影した鳥取県の写真を見たことがある方も多いと思います。一方で、50年前の鳥取県を上空から撮影した写真を見た方は少ないのではないのでしょうか。例えば、鳥取市街を撮影した第1次(昭和43年・1968)と第11次

(平成30年・2018)の二つの写真を見比べてみましょう(写真1・2)。住宅地・商工業地の拡大やバイパスの開通など、変化を見て取ることができます。航空写真は13コースに分かれて撮影されており、第10次までの写真は鳥取県立博物館のホームページでも閲覧することができます。

地上定点写真は地域の景観の変化などを記録するために高所から広い範囲を撮影した「展望定点写真」と、範囲を限定して人々の生活を記録した「平地定点写真」があります。これらの写真からは、駅前の人々の往来や交通、施設の変遷や集落の変化などを読み取ることが出来ます。例えば米子駅前の第1次・第11次の写真をくらべてみる

と、駅前の建物の高層化や交通事情の変化を確認出来ます(写真3・4)。また、松崎駅前の写真を比べると(第1次・第10次)、50年を経ても東郷温泉の玄関口としての風情は変わらず、郷土の見どころしやすい価値を再発見することにもつながります(写真5・6)。

こうした撮影の成果を、倉吉市・八頭町・日吉津村・大山町・岩美町の会場を巡回して展示していきます。また、令和2年2月には当館において展示する予定になっています。ぜひ会場に足を運んでいただき、懐かしい風景や町並みに想いを馳せたり、鳥取県の今昔について理解を深めていただければ幸いです。

(学芸課 やまもと りゅういちろう 山本 隆一郎)

(写真3)米子駅前 第1次写真



(写真4)米子駅前 第11次写真



(写真5)松崎駅前 第1次写真



(写真6)松崎駅前 第10次写真



■鳥取県立博物館特別移動展示観覧料:一般/180円(団体/150円)大学生以下・70歳以上無料

「ジネズミ」を知っていますか？

じつはモグラの仲間です

みなさんは「ニホンジネズミ（以下、単にジネズミと表記します）」（写真1左）という動物をご存知でしょうか？

名前からは「地面にいるネズミ」を想像されるかもしれませんが、正確にはネズミの仲間、つまりげっ歯類（ネズミ目）ではなく、モグラの仲間（トガリネズミ形目）に分類される動物です。

ジネズミの特徴

では、モグラの仲間であるジネズミには、どのような特徴があるのでしょうか？ げっ歯類のヒメネズミと比較してみましょう。

最も重要な特徴は、歯の形です。げっ歯類では立派な切歯（前歯）が目立ちます（写真2）。この仲間は、植物質を中心とした雑食性です。大きく頑丈な切歯は、クルミやドングリなどのかたい木の実をかじって中のおいしい部分を食べる時などに役立ちます。

一方、ジネズミやモグラでは、小さくて鋭い歯が並んでいます（写真3、4）。これらの仲間は昆虫やミズをおもに食べます。こういった獲物は表面の皮膚がかたくツルツルしていて、すばやく逃げ回ります。そのため小さく鋭い歯は、それらの表皮に食い込ませ、逃がさないようにするのに役立ちます。また表皮に穴をあけて破砕することで、中身の栄養価の高い部分を効率よく吸収することができるのです。

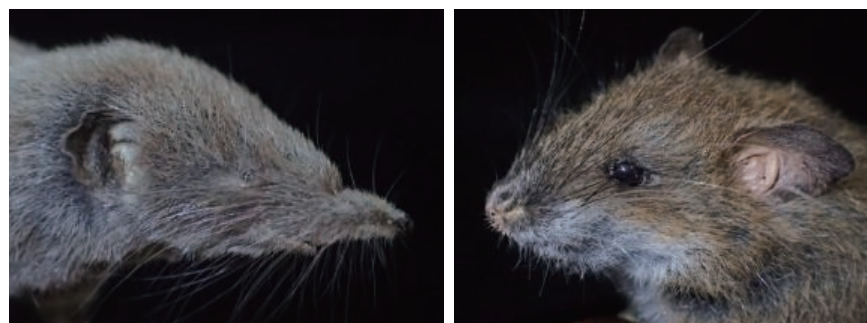


写真1. ジネズミ（左）とヒメネズミの剥製（上段：全体；下段：頭部拡大） ※スケールは15cm

顔つきにも違いがあります。ジネズミの顔（写真1下段左）は鼻先がとがっていて、イラストなどで描かれる「ネズミ」とよく似たイメージです。しかし実際のネズミ（写真1下段右）は、もっと丸い顔つきです。また多くのネズミにくらべて、ジネズミは目や耳が小さいことも特徴です。

派手さはないけれど

ジネズミは日本固有種で、北海道南部から南西諸島北部までほぼ全国的に分布し、林地や農耕地、人家周辺など様々な環境にくらしています。私たちの身近にいる動物、といえますが、体

が小さく、茂みなどにひそんでくらしているため、実際に目にする機会はめったにありません。

見た目の派手さはなく、絶滅危惧などの話題性もなく、人間に直接の利益をもたらすこともなければ、畑を荒らすなどの害を与えるわけでもない…。一般の人々とは関係の薄いジネズミですが、そんな彼らも、鳥取の野山で生態系の一員として生きているのです。

話題性や経済効果ばかりが求められる人間社会に疲れたら、こんな生き物たちに思いをはせてみるのもよいかもしれません。

（学芸課 一澤 圭）



写真2. ヒメネズミの頭骨（矢印は切歯）



写真3. ジネズミの歯



写真4. コウベモグラの頭骨

戦国時代の因伯を駆けた風雲児たち 一 尼子再興戦450年一

鳥取県下に関わる戦国時代の重要な戦乱に「尼子再興戦」があります。この尼子再興戦は山中鹿介^{やまなかしかのすけ}ら尼子旧臣とその主人・尼子勝久^{あまこかつひさ}による、尼子家の再興を目指した飽くなき挑戦です。令和元年はこの尼子再興戦から450年の節目の年に当たります。そこで、その挑戦と当県の関わりを紹介します。

尼子氏は月山富田城^{がっさんとうぶじょう}（安来市）を本拠とした戦国大名で、最盛期は山陰のみならず山陽側にも進出、将軍から上洛を期待されるほどの大大名でした。しかし、安芸国（広島県）の毛利元就^{もうり もとむね}の攻撃によって、永禄9年（1566）に当主・尼子義久^{あまこよひさ}が降伏し尼子氏は事実上滅亡してしまいました。

さて、尼子氏の旧臣たちの中には「お家再興」を願う人々がいました。彼らは永禄12年（1569）尼子勝久をリーダーとして山陰に入り、出雲国忠山^{ちゅうやま}（島根県松江市）を経て真山城^{まやまじょう}（同市・写真1）を本拠地としました。当時、毛利氏の軍勢力は豊後国（大分県）の大友宗麟^{おおいともりん}の軍勢と対峙するため出兵しており、出雲・伯耆国の武将たちも九州に出陣していました。

再興軍の戦略は毛利氏の軍事的な空白を衝くことにくわえて、旧尼子家臣や縁の深い国衆（地元の領主）らを味方につけることも重要でした。再興軍が出雲国に入ったという報は広がり、出雲・伯耆・美作などの武士が集



（写真1）真山城から臨む穴道湖

まり一大勢力を形成しました。中には、北九州に出陣していた米原綱寛^{よねはらつなひろ}のように、再興軍への対処のため帰国すると見せかけて再興軍へ参加を表明する者すらいました。再興軍は伯耆国を重視しており、勝久が入国後に尼子家縁の経久寺^{きょうきゅうじ}（南部町）に出した古文書が当館に所蔵されています（写真2）。

尼子再興軍の勢いは盛んではあったものの、月山富田城を預かる天野隆重^{あまのたかしげ}らの奮戦により、落城させることはできませんでした。さらに、事態を重く見た毛利氏が派遣した援軍と再興軍は布部^{ふべ}（島根県安来市）で激突し再興軍は敗走、結果として出雲国の情勢は徐々に毛利氏有利となります。元亀元年（1570）には伯耆国に山中鹿介^{やまなかしかのすけ}が出陣し巻き返しを図るものの古川元春^{ふるかわもとはる}の猛攻にあい、翌2年には尼子勝久は山陰を脱出しています。しかし、勝久による再興への挑戦は毛利氏への反抗という側面を強めながらも、勝久が天正6年（1579）に上月城^{うづつぎ}（兵庫県佐用町）で自刃するまで続



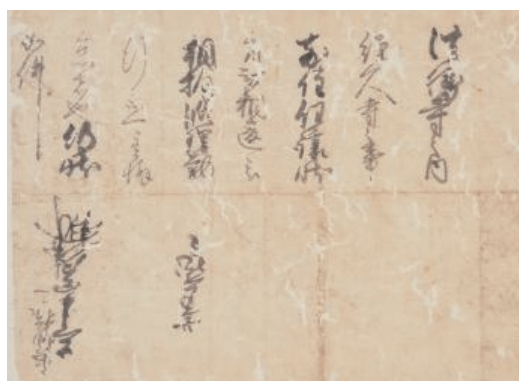
（写真3）尼子家に伝わる文書箱

きます。

永禄・元亀年間の尼子再興軍に対して義勇兵的なイメージを抱きがちですが、彼らは旧尼子氏高官たちを中心とした政治機構をもっており、戦国大名としての実態を備えていました。また、尼子再興軍の中では伯耆国曲村^{まがひむら}（北栄町）に土着した熊谷新右衛門、再興戦後に土着し後に鳥取藩に召し出され藩士になった尼子勝右衛門^{あまこしょうう}など、伯耆・因幡国で暮らすようになる人々も多くいたようです。鳥取藩士となった尼子家には、尼子勝久や豊臣秀次^{とよとみひでつぐ}の文書、尼子家の家紋があらわれた文書箱などが伝存しています（写真3）。再興軍の記憶は、鳥取県に深く根付いていると言えるでしょう。

（学芸課 山本 隆一朗^{やまもと りゅういちろう}）

【大意】
法勝寺の経久寺住職のことは、前の住職の譲状の内容のとおり芳蔵主が務めなさい。寺の修理やおつとめに怠りがあつてはいけません。



（写真2）尼子勝久安堵状（経久寺文書）

テーマ展示

コレクション展「美術家大辞典」を編み始めて

会期：〈近現代編〉「さ行・た行の美術家」2019年10月5日(土)～12月8日(日) 〈近世以前編〉は約1ヶ月半ごとに展示替えをしています。

近年、美術館のありようを特徴付ける「コレクション」に改めて光を当てた展覧会が全国的に開催されています。自館の収蔵作品の形成過程から現在までを見つめ直す機会、あるいは他館の特徴的なコレクションを借用することで異なる地域・分野の作品に触れる機会がおおずと増えているわけです。事実、当館でもこの一年間で、「Our Collections!」と「ニューヨーク・アートシーン」という2つの展覧会を通じて、自館・他館のコレクションの样相に触れてきました。それでもなお実際には、身近な博物館・美術館にどのような作品が収蔵されているのかということに意識的な方はさほど多くないでしょう。

そこで当館では、2019年4月より、

「美術家大辞典」と冠して美術部門のコレクション展を始めました。近世以前と近現代で時代を区分し、それぞれ収蔵作品の作者を五十音順に取り上げながらすべて紹介するという試みであり、2年間をかけて完結する予定です。2024年度に倉吉市に開館予定である県立美術館の母体となる美術コレクションの全貌を見直すことが直接の契機であったものの、正直なところ、テーマ性を排除した辞典形式での展示に不安が無かったわけではありません。しかし実際に会場で作品を見て廻ると、血縁・師弟関係・交友関係・同時代のグループといった作家同士の繋がりや、作品の造形上の関連性が次々に立ち現れてきました。脈絡なく切り取るコレクションの断片からも鳥取県のアート史

が垣間見える—それは、郷土にゆかりのある作家や作品を集中的に収集してきたという開館以来の努力の賜に他なりません。

「美術家大辞典」はこの先も続きますので、会期ごとに辞典のページを捲るように会場へお越しいただき、無数の繋がりを探しながら、当館の美術コレクションの全貌をご覧いただけたらと思います。

(美術振興課 ともおか まほ 友岡 真秀)

2019年度は「た行」まで、2020年度は「な行」以降のすべての美術家を展示予定です。



コラム

“美術館が建つまで”を伝えるフリーペーパーを発行します!

—美術館整備推進事業『アートの種まきプロジェクト』

2024年度に予定されている県立美術館の開館に向け、様々なセクションで準備が進んでいます。建設予定地での工事が始まると、その実感も一気に高まってくると思いますが、老若男女問わず、いたる所で美術館に関する話題が挙がるのが重要と考えています。

そのような状況になることをめざして、当館では、美術館が開館するまでの間に「アートの種まき」と題して、アート系のイベントを県内各所にて実施する予定にしています。その企画の一つとして美術や美術館にまつわる様々な情報を紹介するフリーペーパーを発行する事業を進めています。これは、現在全国で活躍中の編集者で、多数のアートプロジェクトにも携わっておられる多田智美さんに編集ディレクショ

ンをお願いし、記事の作成や取材を県民の皆様と一緒にしようとするものです。様々な情報が溢れる現代において、情報は一方的に受け取るだけでなく、発信する側になって広く拡散させることも可能になりました。その

ような情報発信に長けた方や、記事作成や編集に関心のある方、そして美術館建設を応援してくださる方などと共に、魅力的で親しまれるフリーペーパーを作成したいと思います。

参加から参画へ、共同から協働へ。アートを通じて多くの方々が交流でき



編集者とデザイナーらとの会議の様子

る仕組みを構築しつつ、美術館への期待感を創出する新しい試みに、ご注目ください。

(※フリーペーパーの初号を近日発行する予定です。)

(美術振興課 やまもと とおる 山本 亮)

コラム「私たちの県民立美術館」の動き

フェルメール作品が出現？！

今年3月、県立美術館建設予定地の横に、子どもたちの絵がいっぱい詰まった、ヨハネス・フェルメールの《真珠の耳飾りの少女》の看板が設置されました。これは、倉吉商工会議所青年部が、県立美術館ができることを発信していこうと、倉吉市内の全小学生約2500人の絵画や版画を写真に撮って、モザイクアートとして作成したものです。

県では、より多くの方にご覧いただきたいと、モザイクアートをタペストリーにして、倉吉未来中心や倉吉交流プラザ等に巡回展示しています。

「県民立美術館」の実現に向けて

さて、県立美術館は「県民がつくる」をコンセプトの一つに掲げ、県民が参加し共に支え育てる美術館を目指して

います。

官民59団体で組織する「県立美術館と共に歩む中部地区の集い協議会」と定期的に情報交換をしたり、元学芸員で小説家の原田マハさんや金沢21世紀美術館初代館長の^{みのりたか}蓑豊兵庫県立美術館長をお招きした県民フォーラムを共同開催したりしています。

また、美術館支援ボランティアや美術館と周辺施設等との連携を学ぶ研修、美術館告知ポスターのコンテスト、ウェブマガジンによる情報発信など、県民の方々による県立美術館を支える活動が始まっています。

美術館ネットワーク

県では、このほか、県内の美術系文化施設のネットワークづくりにも力を入れており、各館所蔵品を活用した共



自分が描いた絵を探す子どもたち
(3月27日モザイクアート設置記念式)

同企画展や鑑賞システムなど、県内どこにいても美術館の文化的サービスを受けられる環境づくりを進めています。

令和6年度の開館に向けて、美術館が身近に感じられる取り組みを実施していきます。美術館に関する情報は、こちらのホームページをご覧ください。

<https://www.pref.tottori.lg.jp/museumofartpreparatoryroom/>

(美術館整備準備室 ^{いしはら りょう} 石原 理絵)

京都国立博物館からの里帰り展示を行います！

琴浦町の^{さいのおはい じ あと}斎尾廃寺跡は、7世紀後半に創建された山陰唯一の国特別史跡ですが、最近史跡範囲の追加指定により、史跡範囲が拡大することでも話題となりました。ここから出土した仏頭が京都国立博物館に収められています。

このたび当館では、京都国立博物館が所蔵する、この仏頭や^{そぞうん}塑像片をはじめ、紀年銘入りのものとしては、国内最古の^{がきょう}瓦経である倉吉市出土の^{だいにあじ}大日寺瓦経、琴浦町と岩美町から出土した^{さいしし ぐ}弥生時代の祭祀具である銅鐸2口等合計13件の資料を借用して、令和2年3月ま

で歴史・民俗展示室にて展示を行うこととなりました。これは今年度京都国立博物館と互いの所蔵品の貸借を行い、相互の展示の充実を図る事業の一環で借用したものです。

いずれも日頃は展示の機会が少ない資料なので、今回は皆さんにご覧いただける数少ない機会といえます。ぜひお越しください。令和元年9月11日(水)から令和2年3月までの予定です。詳細は後日博物館のホームページでお知らせします。

(学芸課 ^{こやま ひろかず} 小山 浩和)



琴浦町斎尾廃寺跡出土の仏頭(京都国立博物館蔵)
撮影：京都国立博物館

鳥取県立博物館ニュース No.28

令和元年(2019年)9月27日発行

編集・発行 鳥取県立博物館

住所 〒680-0011 鳥取市東町2丁目124番地

TEL 0857(26)8042(代)

FAX 0857(26)8041

URL <https://www.pref.tottori.lg.jp/museum/>

E-mail hakubutsukan@pref.tottori.lg.jp facebook 更新中！

当館HPは
こちらから



- 入館料：常設展／一般180(150)円
()内は20名様以上の団体料金
 - 開館時間：9時～17時(入館は16時30分まで)
19時(入館は18時30分)まで開館する場合あり。詳細はお問い合わせください。
 - 休館日：毎週月曜日(祝日の場合は翌平日が休館日)
国民の祝日の翌日(土、日、祝日の場合を除く)
年末年始(12月29日～1月3日)
- ※具体的な休館日等は、ホームページでご確認ください。



- JR鳥取駅からバスで
 - ①100円バス「くる梨」緑コース「①仁風閣・県立博物館」下車すぐ
 - ②ループ麒麟獅子「②鳥取城跡」下車すぐ
 - ③砂丘・湖山・貴露方面行「西町」下車、約400m
 - ④市内回り若倉・中河原方面行「わらべ館前」下車、約600m
 - JR鳥取駅からタクシーで、約10分
 - 鳥取砂丘・コナサン空港から…鳥取駅行連絡バス「西町」下車、約400m
 - お車で…鳥取自動車道・鳥取ICより約15分
- ※当館駐車場21台駐車可能・満車の場合は県庁北側駐車場【無料】へ

お客様の満足の^{その}へ…
MORRIX
株式会社モリックスジャパン
TEL 0857-23-3641
本 社 鳥取市西条町203-6
倉吉店 倉吉市下田中町870 中瀬ビル3F
<http://www.morrix.co.jp/>

We Find the Way
日本通運
NIPPON EXPRESS
鳥取支店 0857-28-0202